

渋川春海の横顔

広瀬 秀雄*

むかしの公卿の日記を見ると、天文博士とか暦博士とかいわれる人達は、特別な能力を持つとして敬せられると同時に、さわらぬ神にたたりなし式に見られていたようである。陰陽家という名で総称され、村上天皇の時に賀茂保憲がその子光榮に暦道を、弟子安倍晴明に天文道を伝えて以来、賀茂家、安倍家の二流にわかれた。後世賀茂家は勘解由小路家とか幸徳井家とか称され、また安倍家は土御門家ともいう。その知行は 27 石か 30 石程度であったらしい。賀茂家は一時断絶するが、土御門家はもともと陰陽寮の技術者であった諸国陰陽師を統轄し、免許手数料等の収入もあって、実際上は天文家とはいえなかったが、徳川時代に入っても天文暦学関係の人々の上に非常な勢力を持っていた。このような所へ、暦術の新研究を掲げて、墮落した暦学の独立をはかったのが、渋川春海であった。

春海は青少年時代を家業の基所の家の人間として過した。承応元年(1652)にその父の死にあい、親の諸権利を相続したが、その石高は 30 石、四公六民として 12 石、すなわち 30 俵、の実収にあたる。現在にひきあてるとは難しいが、まず年収 20 万円程度ということでは大いにアルバイトに精を出さなくてはならなかったであろう。またこの境遇を抜け出すためには、今世間で注目の的になっている陳腐な宣明暦の改革で名をあげるのがよいのではなかろうかと考えたのかもしれない。とにかく年譜¹⁾によると万治 2 年(1659)頃から余暇に天文を勉強し、また事をなすには今の世はコネと、基所という役柄を活用し、幕府の有力者や高名な学者等に近づき、その名を知られるようにつとめた。

春海のこの方針は的を得ていた。

長崎の南蛮流天文学者の小林謙貞は天和 3 年(1683)に宣明暦による頒暦が、日本では見えない月食を記載していると非難した²⁾。春海の師に当たる池田昌意は、既に寛文 12 年(1672)に宣明暦の代りに授時暦を採用せよと論じたという。小川正意も授時暦を研究したし、有名な関孝和さえも授時発明を著わした。しかしこれらの研究はどれも改暦とは結びつかなかった。改暦を進行させるためには、土御門家の了解が得られ、幕閣を動かす必要があった。しかも新暦法はどこか他のものどちがったもので、また学術上の優位がほこれるものでなければ改暦運動をしても、その結果は前者の轍に終るであろう。

私が昔、礼文島の金環食の中心線を約 1 km 南と推定

すべきであると結論した時、なかなかこれを公表する勇氣を持たなかった。この問題は幸いに的中したが、春海はずっと不幸であった。血気にまかせて、宣明暦を攻撃し、授時暦の優位を主張して、改暦運動に熱中している最中に、宣明暦法による日食予報が的中し、授時暦の予報があたらないという事件に出あった。徳川光圀と共に春海の有力なパトロンであった会津候の保科正之は、その死(寛文 12 年、1672)にのぞみ、改暦を進め、春海にその仕事を担任させるよう遺言したのであるが、その話の進んでいる最中の延宝 3 年(1675)に授時暦の予報失敗事件が生じた。そこで正之の意に沿おうとしていた大老酒井忠清も、春海のいうこともあまりあてにならぬと洩らし、改暦は棚上げになってしまった。

春海の落胆は目に見えるようである。しかし方法が授時暦法であったので、いわば提灯持ちの責任を問われるだけで、改めて独自の暦法を研究するという方向に走ることによって立ち直る手段があったことは、そして春海がその方向に走ったことは日本の暦学としては幸福なことであったと思う。さもなくば、日本の暦学の中国暦よりの解放ということはずっと遅れたことであろう。

失意落胆の春海を再起させた原因は、第 1 に勝負を争う基所の家ではぐくまれた彼自身の性質に求めるべきものであろうが、西内雅氏はまた、20 年来の恩師山崎闇斎の人格であり、その大成した垂加神道であったと指摘されている³⁾。このような試練を経て貞享改暦は成功し、春海は日本暦学の祖といわれるようになった。常人にできることではない。

貞享改暦の成功によって春海は貞享元年 12 月朔日に、幕府に置かれた新重職の天文方に任命され、江戸に永住することになる。100 俵高である。采地 100 石に当る。貞享 4 年には 150 俵、元禄 10 年には 100 俵を加俸されている。青年時代に立てた目標は達成された。幕府は編暦という当時としては重要な国家的権力を握り、幕勢を強化した。それだけではない。当時一流を立てて公認されると、弟子入りしない限りその内容をうかがうことは不可能であった。大きな著作権益のようなものが認められ、保護されていたわけである。毎年暦の原稿を作る春海は、大経師によって京都で作られる板本 20 部を受取る。これを江戸に 7 冊、伊勢 3 冊、伊豆三嶋、奥州会津にそれぞれ 1 冊、奈良に 2 冊配布して、それぞれそこで複製本を作り、勢力圏へ配布されるというしくみである。即ち暦の出版人は春海の下にある。また元禄 10 年には出版人が 28 人あったのを 11 人に特許という文書

* 東京天文台

があるから、天文方は大した勢力であったにちがいない。しかも人を見るに明敏な春海は改暦運動をしている天和3年(1683)に土御門神道の弟子として、陰陽頭土御門泰福の門に入り、その歓心を買っている。また宣明暦の非を挙げて新暦採用を上申した口上書は土御門泰福の口上書をつけて天和3年(1683)12月に出されている。名をすて、実を採ったともいえよう。改暦手当として土御門家へ1000石ほどの現米支給⁹⁾が行われるよう取りはからったことも大きい。

神宮徴古館や神宮文庫に春海の作った天球儀と地球儀、また春海の献納著書が保存されている。このような品を社寺へ献納することについて春海は様子を知った大経師内匠の意見を求めたことがある。これについての内匠(正尚)の年紀不明正月二十三日の手紙が残っているが、そこには社寺の宝蔵へ献納すると、永代出されないから、折角献納してもその中に誰も知らなくなる恐れがあるというような事が書かれている¹⁰⁾。しかし必要な場合に名を採る方法として春海は天球儀、地球儀、著作を伊勢に奉納したとも考えられよう。彼が元禄12年3月に寺社奉行にあてて書いている願書¹¹⁾には、

司天官が無官である例は和漢、古今ともにない。そこで土御門泰福のとりなしを願ってほしい。今のままでは、江戸の司天家は勞の多い編暦の実務をしながら、これが京都の朝議にかかる時は陰陽助賀茂朝臣友親が書記したと表面にでるだけで、私一代はとにかく、後々には江戸の司天家は京都の手代ようになってしまう。

任官というのは〇〇守とか、△△頭とか唱することであるが、このことは遂に実現を見なかった。そこで春海は第2の方法として、この友親を弟子入りさせることにしたらしい。

代々暦博士の家柄の賀茂家は在富(アキトミ)の時に嗣子がなくて絶えたが、賀茂家の仕事は土御門家が引きつぎ、有春から泰重まで4代にわたった時、中国筋にかくれていた賀茂一門の友景が名のり出て、一条関白のとりもちで土御門家に入出入りするようになって、再び造暦の手伝いをするようになった。友親の時に改暦があって新暦採用となると、これに対し賀茂家は何の知識も持っていないので、元禄14年(1701)に賀茂友親は三月から十一月まで春海の所へ内地留学ということになり、その間に春海は貞享暦を伝授した。

編暦の実際の手順は春海の所で暦象に関する部分の原稿を作り、これを土御門へまわして、ここでいわゆる中下段といわれる卜占事項を書き加え、暦原稿が完成することになる。したがって賀茂家の口を入れる所は頒布式だけであろう。春海は毎年暦の調製で多忙であったためでもあろうが、友親が江戸へ留学という事件は、江戸の

重みをますのに力があつた事であろう。そこで春海の自著といわれる年譜にもこのことは、豊原時秋が筈の秘曲を学ぶため足柄へ来たことがあるが、それ以来の盛事であると誌してある。

貞享元年(1684)の改暦からその死の正徳5年(1715)に至る31年間に、春海は天文瓊統と、天文成象図とを著わした程度で、暦の改良につとめた様子はない。これは一つは毎年暦の調製という仕事を自分一人の責任で遂行しなくてはならないことにもよるが、封建社会の常として、これを改正することはその弱点欠点を自認することになるので、自己を破滅に導く恐れなしとしない。そこで星図とか、一般天文とかしかいじれないわけである。天文瓊統が暦理を取り扱わず、広い立場で天文を取扱っていることの一面にはこんな社会事情も見逃がせない。したがって貞享暦の適否をテストするような経常的観測も行われていない。

政府技術者としての春海が、ここまで立身するためにはあるいは異論を弾圧しなければならない事もあつたかもしれない。そこで荒木村英の記しているように、貞享暦法は池田昌意が作ったものを盗んだ¹²⁾という評も出てくるのであろう。しかしこれは春海が授時暦を推奨していた時代のことしか知らない誤解に基くものと思う。壬癸録に記された所から見ても、貞享暦の構成に春海が苦勞したことがわかり、これが他に暦学上の業績を持たぬ池田昌意の作と考えるべき理由は全くない。またこの評については他に何の傍証もない。恐らく授時暦研究家の中で春海一人だけが成功し、しかも改暦の瞬間から、その暦法の詳細が秘密になってしまうことによる貞享暦への誤解と嫉妬からであろう。

老境に入った春海は功なり名遂げた人によく見られるように、少くとも外見は非常におだやかになっていたらしい。数十年来土佐で通信教授をうけていた谷桑山は、はじめて春海に会った時、無学の好々爺のように見えた¹³⁾と書いている。だからといって功名心に溢れた若い日の春海を想像して悪いことはあるまい。サンデー毎日に連載されている小説東京大学を見ると、視学官隈本有尚氏がずいぶん悪玉に描かれているが、同氏の晩年に当たる昭和初年に、時々風変わりな服装で麻布の天文台に姿を見せておられたのを見た私の感じでは、そんな過去の人には見えなかった。予備門で正岡子規を落第させたのが此人かと不思議に思った次第であった。

種々社会的な問題で苦勞した春海は、元禄14年(1701)に表向きを退き、18才のその子昔尹が世に出るように苦心した。正徳元年(1711)にやっと昔尹に家督を譲り隠居することになったが、肝心の昔尹が正徳5年(1715)32才で若死してしまつた。老境の春海のうけた